ミサを生きる（１２）

【ことばの典礼】（３）

■沈黙

ことばの典礼は、黙想を助けるように行なわなければならない。したがって、内省を妨げるような落ち着きのない行動はいっさい避けなければならない。ことばの典礼では、集まった会衆に合わせて短い沈黙のひとときをとることが望ましい。それによって、聖霊に促され、神のことばを心で受けとめ、祈りをとおして応答を用意することができる。この沈黙のひとときは、たとえば、ことばの典礼そのものが始まる前、第一朗読と第二朗読の後、また説教が終わってから適宜とることができる。（「ローマ・ミサ典礼書の総則（暫定版）」５６）

■聖書朗読

聖書朗読において、神のことばの食卓が信者に備えられ、聖書の宝庫が開かれる。したがって、新旧両訳聖書の統一と救いの歴史の統一を明らかにする、聖書朗読の配分が保たれるようにしなければならない。また、神のことばを含む朗読と答唱詩編を聖書以外の他の文書に代えるべきではない。

（同上５７）

会衆の参加するミサの祭儀では、朗読はつねに朗読台から行なわれる。

（同上５８）

伝統によれば、朗読を行う務めは司式者の務めではなく奉仕者の務めである。それゆえ、朗読は朗読者によって行なわれるべきであるが、福音は助祭によって、あるいは助祭が不在の場合は他の司祭によって告げられる。しかし、助祭あるいは司祭が不在の場合は、司式司祭自らが福音を朗読する。さらに、ふさわしい他の朗読者が不在の場合は、司式司祭が他の朗読も行う。朗読した人がそれぞれの朗読の後に応唱し、会衆はそれに答えて、信仰と感謝の心をもって受け取った神のことばに誉れを帰する。

（同上５９）

福音の朗読はことばの典礼の頂点である。福音の朗読に最大の尊敬を払うべきことは、典礼自体が教えることであって、他の朗読にもまして、福音の朗読は特別の栄誉をもって飾られている。福音を告げ知らせるために選任された奉仕者は、祝福あるいは祈りによって自らを準備し、信者はキリストが現存され自分に語っておられることを応唱によって認め、公言し、朗読そのものを起立して拝聴するのであり、また朗読福音書に対しても尊敬のしるしが示されるのである。

（同上６０）